平成２４年　森プロ事業実績：飛騨高山・宝の森プロ

（平成25年3月末現在）

		H22～23年度		H24年度				5カ年
		計画	実績	計画	実績	達成率	備考	計画
集約化(ha)		152	152	81	81	100%		233
作業道（m）		9,800	5,853	2,700	3,139	116%		19,100
間伐等	面積（ha）	65	40	45	25	56%	切り捨て間伐を含む	215
	材積（m3）	5,500	3,264	4,000	3,478	87%	作業道支障木を含む	19,000
備考		既間伐区域を除く全範囲で森林経営計画を樹立。						

H23年度利用間伐等における所有者への還元額	2,472 円／m3
H24年度利用間伐等における所有者への還元額	863 円／m3

施業集約化の状況

・境界明確化事業の予定箇所はすべて終了し、既間伐区域を除く全範囲で森林経営計画を樹立した。集約化作業はほぼ完了したと言える。

施業プランの活用状況

・施業プランを提示して、還元予定額を明示→事業実行→補助金確定前の概算払い→補助金確定後の最終払い、この流れが確立できた。

施業プランナーの養成状況

・プランナー研修等に参加するとともに、研修内容やプラン作成ノウハウを水平展開して、森林整備部門すべての職員がプランナーになれるように進めている。

6月に行った境界杭打ち

作業道の状況

・　当初計画より1年遅れてきているが、予定していた接続線形ができあがり、25年度はこの道を使っての作業が進められる予定である。

・　地山勾配がきついところは、どうしても切取りが多くなるので、緩い谷地形のところを、待避所もかねて土捨て場として盛土を大きめにとっていいという指示で施工してもらった結果、長大な盛土が発生した。施工はしっかりしてくれたので、道自体に問題はないが、予定よりつぶれ地が多く発生したことと、査定事業費よりも多くの費用がかかる結果となった。
　施工業者への指示の仕方を今まで以上に具体的に行う必要を感じた。

・　路盤材として現地資材を有効に活用することで、費用を抑える工夫をした。

・　路面水の排水を考え、欧州型のかまぼこ型横断勾配が出来ないか、施工業者と打ち合わせたが、非常に困難であることが分かった。そのため、24年度は、今まで通りマウンドを作ることで路面水の排水を行うように施工したが、25年度も、作業路改良も含めて、欧州型道づくりの考え方を取り入れられないか現場で取り組んでいきたい。

作業システムの状況　　H24　木材生産性（作業道支障木は除く）　3.2　m3/人・日
同じく団地外での結果　2.1　m3/人・日

・（パルプ材）伐倒（チェーンソー）→集材（グラップル0.45/スイングヤーダ0.45）→造材（プロセッサ0.45）→搬出（6tフォワーダ）→25tトラック
・（用材）伐倒（チェーンソー）→集材（グラップル0.45/スイングヤーダ0.45）→造材（プロセッサ0.45）→4tダンプに積み込み→中間土場へ

・生産性は非常に悪い。昨年度から良くなっていない。特に新規直営班の生産性が上がってこない。25年度から、同じシステムで生産性の高い班と合同で作業させてレベルアップを図りたい。

フォワーダによる搬出状況

スイングヤーダ作業状況

・ちなみに同じような条件で能率のいい班は5～10m3/人・日となっている。

森プロの成果

森林組合と森林組合員との関係
・今まで何度となく座談会を開いてきて、組合の事業の進め方などを説明してきたこともあり、森林経営計画樹立のための経営委託契約を関係するほぼすべての所有者と結ぶことが出来た。

木材生産について
・宝の森団地内に限ったことではないが、自社工場の原木担当者と林産担当が密に連絡を取り合い、山土場、もしくは中間土場で検尺し、自社工場に直送する流れが出来つつある。

作業路網について
・作業路の欄でもふれたが、予算等の関係もあり、計画は1年遅れた形で進んでいる。23年度で完成させる予定の接続線形が、24年度で完成し、25年度は遅れを取り戻す勢いで間伐を進められそうでまた作業路が出来て、山には入りやすくなったことで、地元住民の所有林への関心が大きく高まってきたと感じられる。

研修や視察の受け入れについて
・各地からの研修や視察を受け入れ、失敗も含め見てもらうことで、地域の森林整備に貢献できたとともに、自らの研鑽にもつながった。

JV構成員について
・愛宝産業（有）について、24年度は森プロ団地内での作業は行わなかったが、25年度は冬季に森プロ団地内か、すぐ周辺の経営計画団地内で作業を行ってもらう予定である。

今後の課題
・前年度から引き続きの課題で生産性の向上が見られなかったので、同じ作業体系で高い生産性を出している作業員と合同で作業を行って全体のレベルアップを図りたい。

・既設作業道の改良は今年度も大きな課題である。どこまで大型車を入れて作業をするのかということを考え、また欧州型の考え方も取り入れて行っていきたい。

・林産担当職員が持っている木材搬出のための知識や、プランナーとしてのノウハウを伝えていく取り組みは少しずつ進んでいるが、相変わらず不十分である。今後、森林経営計画を立てる上でも必要であるので、担当者同士で話し合うというレベルを超えて、ノウハウを体系化してまとめ、組合内で共有するといったことも必要と考える。